



●イソギンチャクかサンゴか ーホネナシサンゴの仲間ー

この季節でも阿嘉島は昼間太陽が出ると暑いくらいですが、さすがに海の中は21℃台の寒い日が続いています。これから水温が上がるかという3月から4月にかけては、過去に海岸や港の中で面白い動物が採取されています。それは、カツオノカンムリやギンカクラゲという刺胞動物の仲間です。これらはぷかぷか波間を漂って暮らしていて、クラゲといえばクラゲなのですが、普通のクラゲと違い、実は1つの個体ではなくてたくさんの個体が集まった群体性の動物です（アムスルだより No.60 でも紹介しました）。そして、傘の下からたくさんのクラゲを放って繁殖します。これまでもクラゲが取れたことがあるのですが、残念ながら繁殖には成功していません。今年、もし見つけられたら、また挑戦してみたいと思っています。このように刺胞動物には、ちょっと変わっていて調べてみたい種類

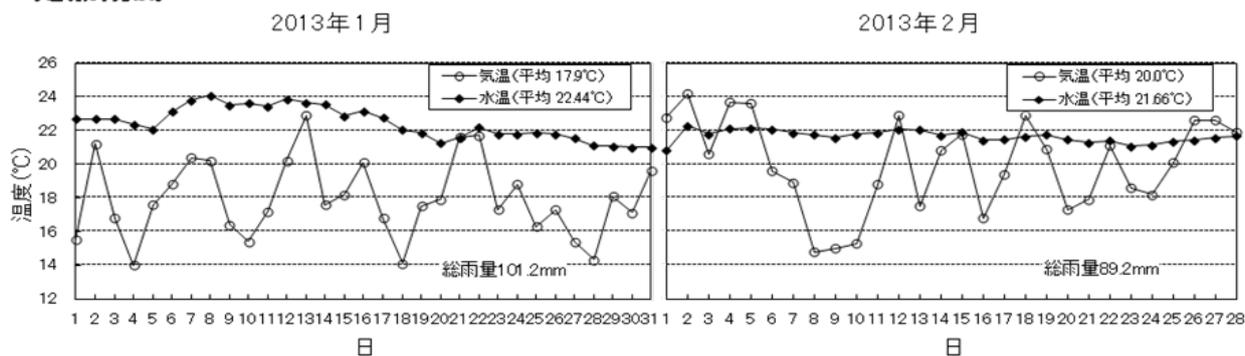
がたくさんいますが、今日紹介するのもそうしたものの1つです。

その動物は、ホネナシサンゴの仲間です。冒頭の写真のようにイソギンチャクにそっくりですが、体のつくりが違って、むしろイシサンゴに近い仲間です。けれども、その名のとおりイシサンゴの特徴である骨格がないという変な動物です。

みなさんにこのホネナシサンゴの仲間を紹介するのは、実は初めてではありません。ミミズクガニというカニのことを書いたときに（No.65）、その体にはり付けられてカムフラージュに使われている生き物として紹介した‘イソギンチャクモドキ’は、このホネナシサンゴの仲間です。イソギンチャクモドキ科の種は、アクアリストたちからはディスクコーラルと呼ばれているように、平べったい体をしていて、造礁サンゴと同じように体内に褐虫藻を住まわせているので茶色っぽい色をしています（写真1）。冒頭の写真のものはそれとはずいぶん違います。体はもっと丸っこいですし、色も茶色くありません。これはホネナシサンゴ科というグループに属していて、それと先ほどのイソギンチャクモドキ科が、ホネナシサンゴ類（目）の代表的な2つのグループです。



定点観測



慶良間の海では、ホネナシサンゴ科の仲間は、そもそもあまり見かけることがありませんが、見つけても1個体かせいぜい2個体だけです。実は、研究所ではこの仲間を2種類飼育しているのですが、1種類は長い間ずっと分裂せず、「この種類は分裂しないのかな」と思っていたところ、最近ぽこっと分裂しました。この種類を飼育し始めたのが2002年ですから、1つ増えるのに実に10年かかったこととなります。もしかしたら特別な環境でないと分裂しないのかもしれませんが、ともあれなかなか増えない種なのだろうと思います。もう1種は、どんどん増えるのですが、体から小さなかたまりがちぎれるように離れて転がるので、元の個体とは別の場所に移動してしまうようです。このようにあまり増えないとか増えても遠くへ移動してしまうことが、ホネナシサンゴ科の仲間を同じ場所でたくさん見かけない理由だと思います。いっぽうのイソギンチャクモドキ科の仲間は、多くの個体が1ヶ所に集まっているのを良く目にします。おそらく1つの個体から分裂して増えたクローンが、その周りに生息しているのでしょう。数十個体が集まっていることもありますから、よっぽど移動するのが苦手なのか(岩にくっついたまま分裂するのでしょうか)、好みの場所でどんどん増えていくかのどちらか(あるいは両方?)だと思います。

このように、ホネナシサンゴ目には形

も暮らしぶりもずいぶん違う2つのグループがあるので、慶良間のどんな所にどんな種類がいてどう暮らしているのか、もっと詳しく調べてみたいと思っているのですが、実は日本ではこの仲間はあまり研究されていなくて、種類を調べるのも一苦労です。けれど、きっと調べればなにかしら面白い発見があるに違いありません。もしみなさんの中にイソギンチャクモドキやホネナシサンゴの仲間の住んでいる場所を知っている人がいたら、ぜひ教えてください。

● 阿嘉島の海より

3月に入って暖かい日が多くなり、日によっては暑く感じるような季節になってきました。そんな中、阿嘉小中学校では平成24年度の卒業式が行われました。今年は小学校から2名、中学校から6名の児童・生徒が卒業していきました。中学校を卒業した生徒は、進学のため生まれ育った島や家族と離れ、沖縄本島に出ていきます。そのため島の中学校の卒業式には都会の学校とは違った特別な意味合いがあります。卒業生一人一人が将来の夢や家族への感謝の気持ち、島に対する思いを語りました。今年も感動の涙に満ちたすばらしい卒業式でした。

